

下鳥羽遺跡発掘調査概報

昭和62年度

京都市文化観光局
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序

西暦 794 年、平安京遷都とともに政治、文化の中心都市として千年以上も存続し続けてきた京都は、現在も大都市として躍進を続ける世界でも極めて希な都市であります。

昭和62年秋には、世界各国の著名な歴史都市の代表者が一堂に会し、世界歴史都市会議が京都市で開催されました。

会議では世界の歴史都市が持つ都市計画論、文化遺産論、都市産業論等の諸問題が討議され、また世界の古い歴史を有する都市において歴史都市会議を継続的に開催することが決議されるなど大きな成果をもって閉幕いたしました。

各々の歴史都市は、埋蔵文化財とは切っても切れない関係にあることが多く、市街地の中央に平安京跡を抱える京都市は、歴史都市の持つ典型的な実例であり、遺跡の保存と開発との調和が常に都市計画における重要な課題となっております。

京都市内で行われる数多くの埋蔵文化財調査では、考古学上貴重な成果を得ることも多く、京都の歴史や変遷を知る上から欠くことのできない貴重な発見が相次いでおります。

この概要報告書は、昭和62年度に(財)京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施いたしました、文化庁国庫補助を伴う埋蔵文化財調査報告であります。調査にあたっては数多くの方々の協力を賜り、また文化庁をはじめ多数の方々の御指導を受けました。

御協力いただいた方々に深甚なる御礼を申し上げますとともに、この報告書が京都の歴史をより深く知る資料として大いに活用されることを切に願うものであります。

昭和63年 3 月

京都市文化観光局

例 言

- 1 本書は、昭和62年度の文化庁国庫補助事業における、下鳥羽遺跡発掘調査の概要報告である。
- 2 発掘調査は、京都市文化観光局が、財団法人 京都市埋蔵文化財研究所に委託し、同研究所がこれを実施した。
- 3 図中に使用したX・Yの数値及び方位は、平面直角座標系VIによる。標高は、京都市遺跡測量基準点と京都市水準点を使用した。
- 4 本書中の地図は、京都市の承認を得て、京都市計画局発行の都市計画基本図の2500分の1・下鳥羽、10000分の1・其五、六、七、八を修正して使用した。
- 5 写真は、遺構・遺物とも牛嶋 茂が撮影した。
- 6 本書は、辻 裕司、磯部 勝が執筆・編集を担当した。

本 文 目 次

1 調査経過	1
2 遺構	2
3 遺物	5
4 まとめ	13

図 版 目 次

図版一 遺跡	調査地点周辺主要遺跡位置図
図版二 遺跡	調査区実測図
図版三 遺物	低湿地状遺構下層・遺物包含層出土土器
図版四 遺物	低湿地状遺構下層出土土器
図版五 遺跡	1 航空写真（南から） 2 航空写真（西から）

- 図版六 遺跡 1 調査区全景（西から）
 2 低湿地状遺構土器出土状況（南東から）
- 図版七 遺物 低湿地状遺構下層出土土器
- 図版八 遺物 低湿地状遺構下層出土土器
- 図版九 遺物 低湿地状遺構下層出土土器
- 図版十 遺物 低湿地状遺構下層・遺物包含層出土土器
- 図版十一 遺物 低湿地状遺構下層出土土器
- 図版十二 遺物 低湿地状遺構下層出土土器
- 図版十三 遺物 低湿地状遺構中層出土土器
- 図版十四 遺物 溝状遺構・竪穴住居址・褐色粘土（礫混）層出土土器

挿 図 目 次

図 1	調査位置図	1
図 2	竪穴住居址実測図	3
図 3	低湿地状遺構中層出土土器	9
図 4	溝状遺構出土土器	10
図 5	竪穴住居址・褐色粘土（礫混）層出土土器	11
図 6	流路出土土器	12

下鳥羽遺跡発掘調査概報

1 調査経過

下鳥羽遺跡は、鳥羽離宮跡の南方に位置する、弥生時代から中世に至る遺跡である。ことに京都市域では、数少ない弥生時代前期に属する遺物が出土する遺跡として、さらには鳥羽離宮下層遺跡（鳥羽遺跡）とともに、一帯に展開する古墳時代の遺跡として周知されている。ところがこれまでに下鳥羽遺跡では顕著な遺構は検出されておらず、当該期の遺構の検出が待ち望まれていた。近年下鳥羽遺跡一帯にも開発の波が押し寄せ、それに伴って試掘・立会調査が実施され、各調査地点で多くの調査成果が得られている。

調査地点は、京都市伏見区下鳥羽城ノ越町34-1・34-2に所在する。当該地に倉庫が建設されることになり、遺跡確認の目的から事前に試掘調査が実施された。調査対象地内の

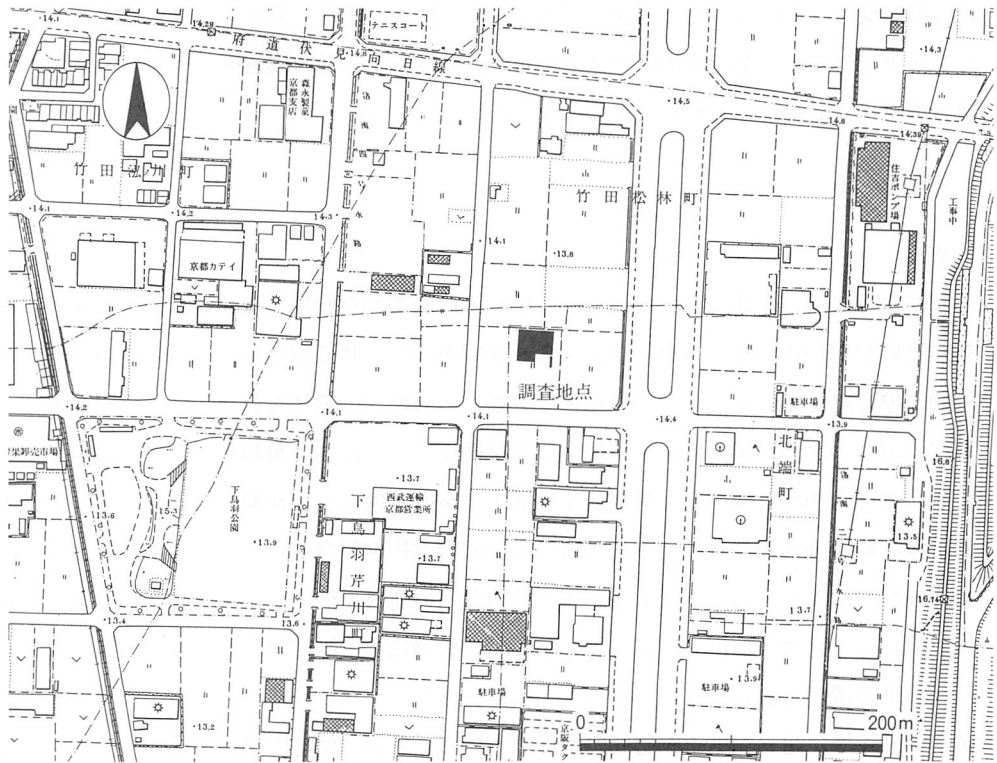


図1 調査位置図

北端、西端中央、東端南半の3箇所に調査トレンチが設けられた。東・西端のトレンチでは湿地状の堆積土層が確認されたものの、顕著な遺構・遺物は検出されなかった。対照的に北端のトレンチでは比較的安定した土層が確認され、古墳時代に属する遺構及び平安時代に属する遺物包含層などが検出された。この試掘調査の結果から、発掘調査に切り替えさらに調査を進めることになった。

調査区は上記の試掘調査成果を基に、調査対象地の北端に接して設定した。調査区は当初東西22m、南北15mの範囲としたが、調査継続中に東西方向の大規模な流路を検出し、その南肩口が調査区外にあること、調査区南端で古墳時代前期に属する遺物が出土したことにより、それらを明らかにする目的で新たに2箇所に拡張区を設けた。1箇所は調査区の南西隅に接して東西11m、南北5mの範囲、1箇所は調査区東端を南に延長した箇所に東西1.5m、南北7mの範囲にそれぞれ設定した。調査面積は拡張区を含め全体で約396m²ある。なお調査は1986年11月17日から1987年1月20日まで実施した。

調査の結果、調査区内はほぼ全域が比較的安定した微高地状を呈しており、各期の遺物包含層が堆積し、それぞれの上面で竪穴住居址、掘立柱建物、焼土塊、溝状遺構、流路などを検出した。また南西拡張区では南へ向かって広がる低湿地状遺構の肩口を検出し、堆積土中より古墳時代の土器が大量に出土した。

2 遺構

層序

調査区の土層は全体にほぼ水平堆積を呈する。基本的な層序は現耕作土層上面から、現耕作土層が厚さ約20cm、旧耕作土層が2～3層あり合わせて厚さ約60cm、にぶい黄褐色泥土層が厚さ約20cmある。にぶい黄褐色泥土層は平安時代の遺物を包含する。この上面で、流路と流路の北側で耕作に伴う小規模な溝を検出した。にぶい黄褐色泥土層下は暗褐色泥土層が厚さ約20cm堆積する。暗褐色泥土層下は暗灰黄色泥土層が厚さ約10cm、黄灰色粘土層が厚さ約10cm堆積し、それぞれ古墳時代後期の遺物を包含する。これら各層の上面で、掘立柱建物、竪穴住居址、焼土塊、溝状遺構などの遺構を検出した。また溝状遺構の東肩口以東には、暗黄灰色泥土層下に灰色粘土層や灰褐色粘土層が厚さ20～30cm堆積し、古墳時代前期の遺物を包含する。上記各層下では、灰ないし灰オリーブ色微砂・細砂・砂礫層、黄褐色砂礫層、暗赤褐色砂礫層などの堆積が続き、各層は南に向かって僅かずつ傾斜する。遺物は包含しない。低湿地状遺構は上記無遺物層を肩口としている。

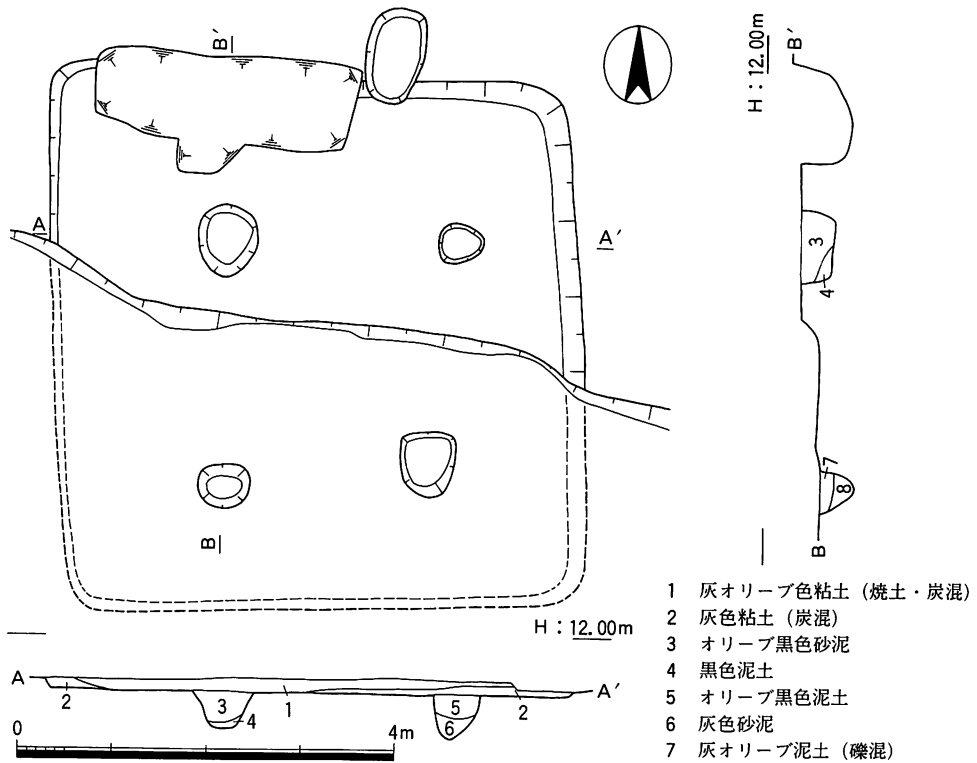


図2 竪穴住居址実測図

遺構

検出した遺構には、竪穴住居址1戸、掘立柱建物2棟、焼土塙1基、溝状遺構1基、流路1条、低湿地状遺構の他、耕作に伴う溝6条などがある。次にその概略を記す。

竪穴住居址 調査区中央北寄りで検出した。南半は流路によって床面などは削平を受けていたものの、支柱穴は遺存していた。また北辺は攪乱を受けている。平面形は方形を呈し、検出面での規模は東西方向が約5.6m、床面までの深さ約15cmある。方位は概ね南北方向を示す。覆土には灰オリーブ色粘土、灰色粘土層が堆積し、焼土・炭を多く含む。覆土除去後に一面に炭層があり、この面で支柱穴を検出した。支柱穴は4箇所ある。平面形はややいびつな円形を呈し、径45～80cmある。柱間は心々間で約2.2～2.6mある。覆土中より古墳時代後期に属する土師器・須恵器（図5 76）が出土した。

掘立柱建物 調査区北西隅で1棟（建物1）、建物1に東接して1棟（建物2）を検出した。建物1は、北・西側は調査区が接する為未調査である。2×2間分を検出した。掘形の平面形は方形を呈し、検出面での規模は1辺80～90cm、深さ50～80cmある。柱間は東西

方向が約2.0m、南北方向が約2.5mある。主軸方向はほぼN 4°Eを示す。建物2は大部分が調査区外にあり、南辺の柱列を検出したにとどまる。掘形の平面形は方形を呈し、検出面での規模は1辺50～70cm、深さ20～40cmある。各々中央に径10～24cmの柱当りを有する。西端の柱穴には径10cmの柱痕が遺存していた。柱間は約1.7mある。主軸方向はN 8°Eを示す。建物1・2とも掘形から古墳時代後期に属する土師器・須恵器が出土した。

焼土壌 竪穴住居址の西側で検出した。北肩口は建物1の柱掘形によって、南肩口は流路によってそれぞれ削平を受ける。検出面での規模は東西方向が幅70cm、深さ16cmある。西肩口と東肩口から底部にかけて非常によく焼け赤変している。底面には焼土・炭層が堆積し、その上に焼けた壁体が崩落していた。古墳時代後期の土師器が出土した。

溝状遺構 調査区中央で検出した南北方向を示す遺構で、北は調査区外へ延びる。南は流路によって、西肩口の一部は竪穴住居址によってそれぞれ削平を受ける。底面はほぼ平坦で、東肩口付近はやや深い南北方向の溝状を呈する。検出面での規模は幅約10m、深さ約20cm、東端は約70cmある。東半の底面には僅かに焼けた箇所が9箇所ある。また西肩口に沿って堆積土層中に焼土を大量に包含する箇所がある。灰色粘土層、灰褐色粘土層が堆積し、主に東肩口付近から古墳時代後期に属する土師器・須恵器（図4）などが出土した。

流路 調査区南半で検出した、僅かに蛇行するもののほぼ東西方向を示す遺構である。東・西へは調査区外へさらに延長する。北肩口は2～3段落ちを呈し、底部は概ね平坦である。検出面での規模は幅8～10m、深さ約1.3mある。堆積土層は、黄褐色から褐色系の砂礫層が主体で、砂礫層間には微砂・細砂・腐植土層などが堆積する。このうち上層からは平安時代前期から中期、中・下層からは平安時代前期、北肩口中央付近からは奈良時代に属する遺物が出土した。出土遺物（図6）には、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・無釉陶器・瓦・土製品・木質遺物・種実などがある。また東拡張区で検出した流路南肩口の南側で、杭10本、杭痕15箇所を検出した。杭は径4～6cm、残存長は長いもので約50cmあり、いずれも先端は鋭く尖らせている。なお流路完掘後、西端の北肩口下面に褐色粘土（礫混）層が厚さ8cm、約2m四方にわたり堆積する箇所があり、層中より古墳時代後期に属する土師器・須恵器（図5）・円筒埴輪などが出土した。

溝 流路の北側で検出した。南北方向のもの2条、東西方向のもの4条あり、南北方向のものが新しい。検出面での規模は幅20～240cm、深さ20～30cmある。褐色泥砂やにぶい黄褐色泥砂が堆積する。おおよそ南北方向のものはN12°W、東西方向のものはE5°N振れる。各溝から土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦などの細片が出土した。

低湿地状遺構 南拡張区で検出した。南方に向かって展開する湿地状を呈した遺構の北肩口の一部である。肩口上半は流路によって削平を受けているものの、堆積土層や下層で検出した肩口の状況から復原すると、ほぼ調査区南寄りで完結する。軟弱な微砂・粘土層が厚く堆積する。検出面からの深さは約2.8mあるが、土層が危弱なため一部深掘りで確認したにとどまる。次に堆積土層や出土遺物から上・中・下層に大別して概要を述べる。

上層は灰色微砂・粘土層からなり、検出面からの深さが約40cmある。古墳時代後期の土師器・須恵器の小片が出土した。中層は検出面からの深さが75cmあり、灰ないし灰オリブ色の微砂・粘土層が堆積する。主に灰色粘土層から古墳時代後期の土師器・須恵器（図3）が出土した。この中層まではほぼ水平堆積を呈し、次の下層との間には、ほとんど遺物を包含しない暗オリブ灰色微砂層が堆積する。下層は南に向って厚く堆積し、オリブ灰色粘土層、暗オリブ灰色粘土層（炭混）、暗オリブ灰色粘土層がある。検出面からの深さは最も浅い箇所40cm、最も深い箇所2.0mある。このうちオリブ灰色粘土層からは、古墳時代前期の土師器（図版四 47～53）が出土した。また暗オリブ灰色粘土層（炭混）からは、肩口に沿って完形ないし完形に復原できる大量の土師器（図版三・四 1～46）が出土した。暗オリブ灰色粘土層からは、土師器の細片が僅かに出土した。最下層には暗オリブ灰色微砂が堆積するが、遺物は出土していない。

3 遺物

各遺構や遺物包含層から遺物整理箱で85箱の遺物が出土した。このうち12箱が木質遺物で流路から出土した。土器類は各遺構や遺物包含層のうち主要なものを図示した。

低湿地状遺構・遺物包含層出土土器（図版三・四）

土師器があり、器形には壺・甕・高杯・鉢・器台・手焙形土器などがある。図示した土器のうち（1～29・31・32・34～46）は暗オリブ灰色粘土層（炭混）から、（45～53）はオリブ灰色粘土層から、（30・33）は遺物包含層の灰色粘土層から出土した。

壺（1～6・47）（1・2）は球形に近い体部に二重口縁がつくが、口頸部は欠損する。1の底部は小さく中央部が窪む。体部外面にヘラミガキを施す。上半には櫛描き直線文と波状文を頸部まで交互に巡らす。内面はハケメ及びナデ調整する。2は体部外面にヘラミガキを施す。頸部近くに断面三角形の突帯を巡らし、外面に竹管文と刻目文を配する。内面は体部下半をハケメ、上半をナデ調整する。体部最大径は、1が19.2cm、2が22.1cm。（47）は二重口縁で、屈曲面に粘土を補足する。口縁端部は丸くおさめる。内外面の一部

にヘラミガキを施す。口径20.1cm。(3・4)は体部が卵形を呈する。3は外傾する口頸部がつく。底部は小さく丸みを帯び、中央部は窪む。外面は密なハケメ調整するが底部付近にはタタキメが残る。内面は工具によるナデ調整する。口径12.1cm、器高28.8cm。4は口頸部がやや屈曲して受口状を呈する。口縁端面は内傾する。内外面とも粗いハケメ調整する。口径10.2cm、器高24.8cm。(5)はソロバン玉形の体部にやや屈曲する口頸部がつく。外面はヘラミガキを施す。内面は下半をハケメ、上半をナデ調整する。口径11.0cm、器高27.1cm。(6)は底部が丸底で、口頸部は直線的に外傾する。口頸部内外面と体部外面はヘラミガキ、内面は下半をハケメ、上半を工具によるナデ調整する。口径8.1cm、器高14.6cm。

甕(7~25・48~50) (7~10)は体部がやや丸みを持ち口頸部は外反し、鉢形を呈する。口縁端部は8が上方につまみあげ、7・9・10は丸くおさめる。8の体部は底部から内湾ぎみにたちあがる。外面は7~9がタタキメ調整。10は底部付近をハケメ、他を工具によるナデ調整する。7は口径9.7cm、器高9.4cm。8は口径13.5cm、器高11.1cm。9は口径14.3cm、器高14.6cm。10は口径11.4cm。(11~13)は口頸部が外傾し、口縁端部は丸くおさめる。11は外面をタタキメののち粗いハケメ、内面は口縁部をハケメ調整する。12は外面肩部と内面をハケメ調整する。13は外面をタタキメののち底部付近をヘラケズリ調整、内面は工具によるナデ及びハケメ調整する。11は口径9.4cm。12は口径11.6cm、器高14.4cm。13は口径12.0cm、器高15.2cm。(14・15)は丸みのある体部に外反する口頸部がつき、口縁端部は丸くおさめる。外面はタタキメ調整するが、15はさらに体部中位をヘラケズリ調整する。内面は14が底部をハケメ、他を工具によるナデ調整する。15はハケメ調整する。14は口径13.3cm、器高14.0cm。15は口径13.0cm、器高15.1cm。(16~21)は口頸部が外反し、口縁端部は16~19が上方につまみあげ、20・21は端面が外傾する。外面はタタキメ調整するが、19~21はさらに体部下半を粗いハケメ調整する。内面は16・18・19が工具によるナデ調整、17は下半を工具によるナデ、上半をハケメ調整、21は底部をハケメ、他をナデ調整する。16は口径13.6cm。17は口径15.6cm、器高18.4cm。18は口径19.2cm、器高28.7cm。19は口径19.0cm、器高26.0cm。20は口径16.4cm、器高26.5cm。21は口径16.6cm、器高26.3cm。(22)は口頸部が屈曲し、受口状を呈する。外面はハケメ調整するが、底部付近にタタキメが残る。内面は下半をハケメ、上半をナデ調整する。口径16.4cm、器高26.3cm。(23)は口頸部が内湾ぎみに外傾する。口縁端部は丸くおさめる。大型の器形の割に器壁は薄い。外面はタタキメののち粗いナデ調整する。内面は底部をハケメ、他をナデ及び工

具によるナデ調整する。口径26.6cm、器高39.6cm。(24・25) 砲弾形を呈する体部に外反する口頸部がつく。口縁端部は、24が丸くおさめ、25はさらに水平方向に開く。24は内外面ともハケメ調整する。25は外面をタタキメののち粗いハケメ調整、内面はヘラケズリ調整する。24は口径14.5cm、器高20.2cm。25は口径15.8cm、器高24.2cm。(48・49) は球形に近い体部に、内湾ぎみに外傾する口頸部がつく。口縁端部は内側に肥厚する。48はやや肩が張る。外面は48が粗いタテ方向のハケメののちヨコ方向にハケメ調整し、下半は丁寧なナデ調整する。49はハケメののち肩部と底部は丁寧なナデ調整する。内面は48・49とも頸部下を密にヘラケズリ調整する。ヘラケズリは底部のオサエ痕上面にまで及ぶ。48は口径13.2cm、器高15.8cm。49は口径17.8cm、器高25.7cm。(50) は複合口縁で、口縁端部は内外に肥厚する。体部外面はタテ方向のハケメののち肩部付近にのみヨコ方向に密にハケメ調整し、その後体部中位をヘラケズリ調整する。内面は頸部下をヘラケズリ調整する。口径22.1cm。

高杯 (26~32) (26・27) は杯部が底部からやや屈曲し、外上方に大きく開く。脚部は中位付近で角度を変え、裾部は外下方へ開く。脚部中位付近に3箇所透しを配する。杯部及び脚部外面はヘラミガキ、内面は筒部がヘラケズリ、裾部はハケメ調整する。口径20.0cm、裾部径15.3cm。(28・29) は杯部が底部からく字状に強く屈曲し、外上方へ開く。脚部は短かい円筒状の筒部から角度を変え、直線的に外下方へ開く。裾部に4箇所透しを配する。28は口縁端部を上方に拡張して面をつくり、櫛描き列点文を巡らす。内外面ともヘラミガキを施すが、裾部内面はナデ調整する。口径21.4cm、裾部径12.7cm。(30) は口縁部を欠損する。杯部は直線的に大きく開く。脚部は外下方に向かってラップ状にゆるやかに開き、4箇所透しを配する。脚部内面にしぼり目が残る。裾部径15.1cm。(31) は杯部が斜め上方に開き、外下方に向かってゆるやかに開く脚部がつく。裾部に3箇所透しを配する。口径13.2cm。(32) は杯部の底部と体部の境界で屈曲し、体部は直線的に外上方に開く。脚部はやや上方で角度を変え、外下方に開く。脚部中位に3箇所透しを配する。内外面ともヘラミガキを施すが、脚部内面はハケメ調整する。口径21.2cm、器高17.0cm、裾部径14.9cm。

鉢 (33~42、51・52) (33) は口頸部が受口状を呈する。外面はハケメ調整ののち口縁部から体部上半にかけて、櫛描き列点文・直線文・波状文を巡らす。口径16.3cm、器高10.7cm。(34) は外上方に開く体部に外反する口頸部がつく。口頸部はオサエのみ、体部内外面は粗いハケメ調整する。口径14.0cm、器高10.7cm。(35) は丸い体部に短かく直立した口頸

部がつく。外面は口縁部までタタキメ調整、内面は工具によるナデ調整する。口径9.8cm、器高9.6cm。(36)は口頸部がく字状に外反し、口縁端部はやや上方につまみあげる。外面はハケメ、内面は工具によるナデ調整する。口径11.6cm。(37~39)は体部がやや内弯ぎみに外上方に開く。38・39は底部に1箇所穿孔がある。37は底部内面が工具によるナデの他は未調整。38は外面は粗いタタキメ調整、内面はハケメ調整する。39は外面が底部付近をハケメ調整し、他は未調整。内面はナデ調整する。37は口径12.4cm、器高6.2cm。38は口径13.1cm、器高10.0cm。39は口径16.9cm、器高8.9cm。(40)は体部がやや丸みをもつ。口縁部はナデ、内面は工具によるナデ調整する。口径9.1cm、器高6.8cm。(41・42・51)はやや扁平な丸底を呈し、短かい口頸部がつく。41・42は体部外面を底部から斜め上方へヘラケズリ、口頸部及び内面はナデ調整する。51は体部外面をヨコ方向のヘラケズリ、内面は粗いヘラミガキを施す。41は口径12.2cm、器高6.8cm。42は口径11.0cm、器高7.1cm。51は口径11.7cm、器高5.6cm。(52)は丸底の体部に複合口縁がつく。体部外面は細かいハケメ、内面はヘラケズリ調整する。口径11.4cm。なお41・42は密着して出土した。

器台(43~45) (43)は受部が底部から僅かに角度を変え、斜め上方に開く。脚部は受部との接合位置から直線的に外下方へ開く。脚部に4箇所透しを配する。内外面ともヘラミガキを施すが、脚部内面はナデ調整する。(44・45)は受部が外反し、脚部はやや内弯ぎみに外下方に開く。脚部に4箇所透しを配する。45の口縁端部は上方につまみあげる。内外面ともヘラミガキを施すが、脚部内面及び44の受部外面は工具によるナデ調整する。43は口径18.0cm、裾部径10.8cm。44は口径9.2cm、器高8.0cm、裾部径10.5cm。45は口径10.3cm、器高9.6cm、裾部径11.0cm。

手捏ね土器(46) 体部は卵形を呈する。内外面とも未調整。口径4.4cm、器高6.0cm。

脚付小型丸底壺(53) やや扁平な丸底を呈し、口頸部は直線的に外上方に開く。脚部は中程で角度を変え、外下方に開く。裾部に4箇所透しを配する。内外面はヘラミガキを施すが、裾部内面は工具によるナデ調整する。口径11.0cm。

低湿地状遺構中層出土土器(図3)

土師器(58~64)には甕・高杯がある。

甕(64) 口頸部は外傾し、端部は内側に肥厚する。口縁部内面と体部外面はハケメ、内面の頸部以下はオサエを行う。口径18.2cm。

高杯(58~63) 杯部の形態は(58・59)がゆるやかに外上方に開き碗形を呈する。(60)はやや丸みを持ち漏斗状を呈する。(61)は口縁部が内弯し、底部と体部の境に稜がある。

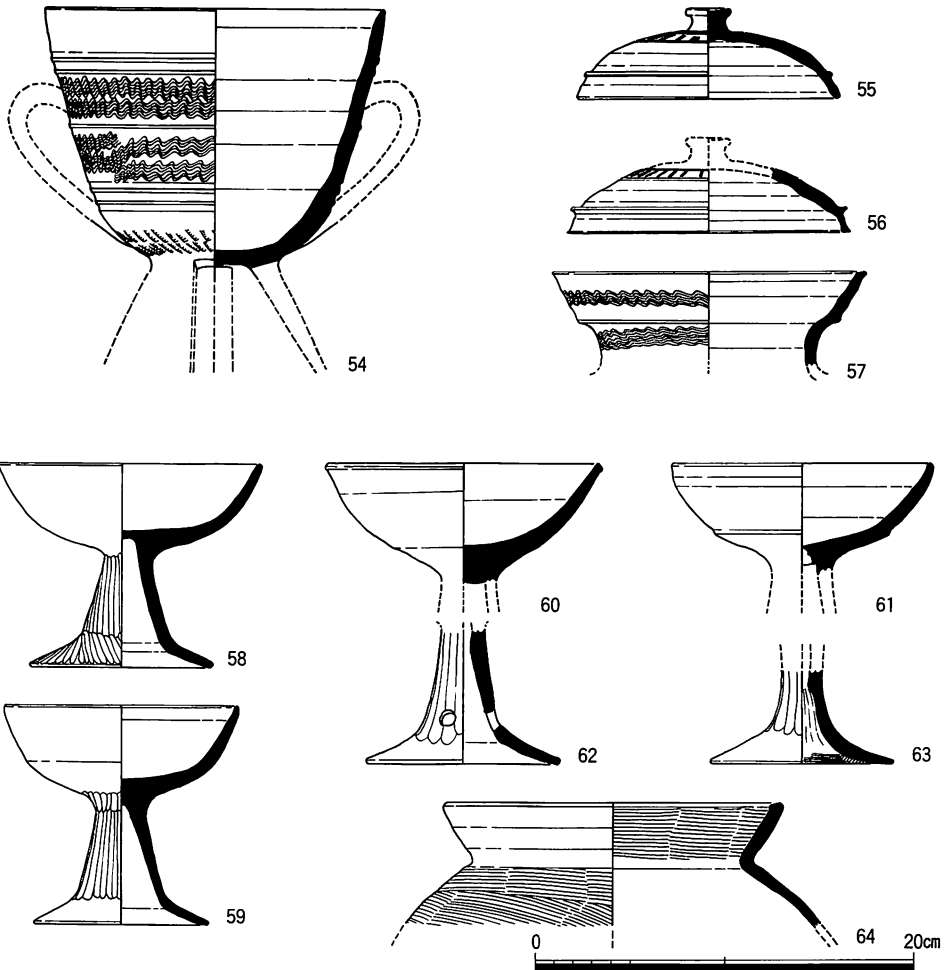


図3 低湿地状遺構中層出土土器

脚部は下方で角度を変え、裾部は大きく開く。脚部外面はヘラミガキを施す。内面は筒部がヘラケズリ、裾部が工具によるナデ調整する。(63)は筒部内面にしぼり目が残る。58は口径13.9cm、器高10.7cm、裾部径9.7cm。59は口径12.4cm、器高11.5cm、裾部径9.2cm。60は口径14.6cm。61は口径13.9cm。62は裾部径10.2cm。63は裾部径9.7cm。

須恵器 (54~57) 高杯・蓋・甕・甕がある。

高杯(54) 深い碗形を呈する。脚部・把手は欠損する。体部は直線的に外上方にのび、口縁端部は丸くおさめる。体部の上・下端に2条、中位に1条の稜線を巡らして文様帯を設け、櫛描き波状文を各2条分配する。底部に2段の櫛描き列点文を放射状に配する。把手は2個つく。脚部には4箇所透しがある。杯底部に同心円の切り込みを入れ脚部を接合

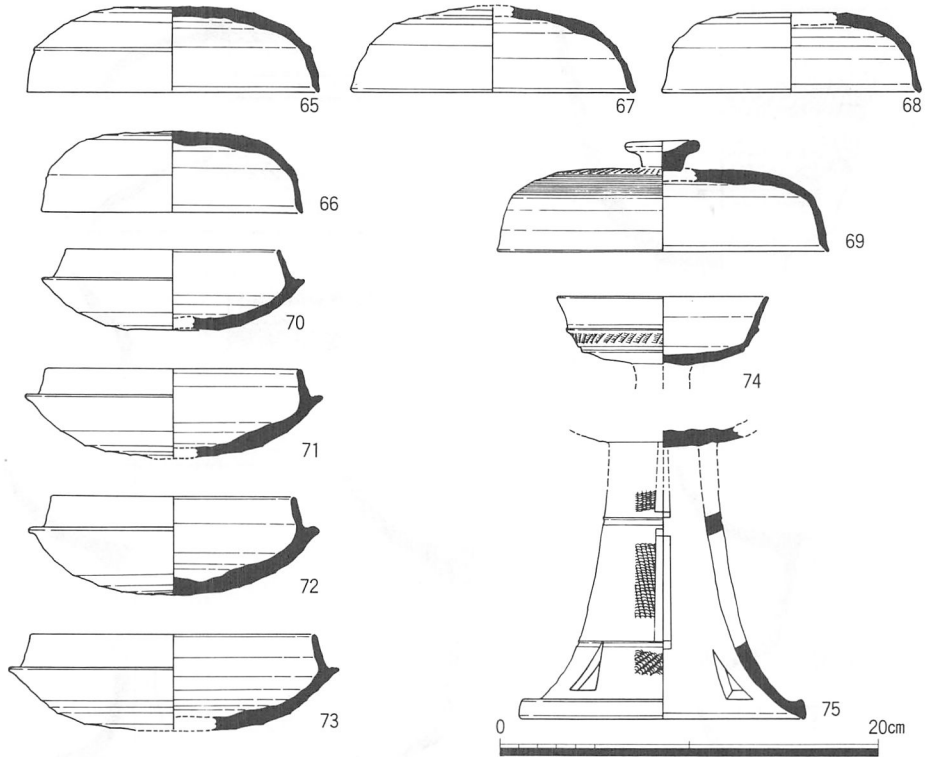


図4 溝状遺構出土土器

する。口径16.0cm、杯部高13.5cm。

蓋(55・56) 天井部は丸みを持ち、中央が僅かに窪むつまみがつく。天井部と口縁部の境に突帯が巡る。口縁端部及び突帯は、55が丸くおさめ、56は鋭い。つまみの周囲に2条の凹線を巡らして文様帯を設け、櫛描き列点文を放射状に配する。55は口径14.0cm、器高5.8cm。56は口径15.0cm。

甕(57) 口頸部はやや短かい。頸部は外反し、口縁部は外上方へ直線的にのびる。頸部と口縁部の境は鋭い。頸部と口縁部に櫛描き波状文を配する。口径16.6cm。

甕は口頸部と体部があるが、小片で図示していない為概略を記す。口縁端部は丸くおさめ、口頸部に上下1条ずつ突帯を巡らす。体部外面は平行タタキメをヨコ方向のナデ消し、内面は丁寧にヨコ方向にナデ消しを行う。

溝状遺構出土土器(図4) 土師器・須恵器があるが、土師器は細片で図示していない。須恵器には、杯蓋・杯身・高杯・甕がある。

杯蓋(65~69) (65~68)は天井部の丸みが少なく、口縁端面は内傾する。天井部と口縁

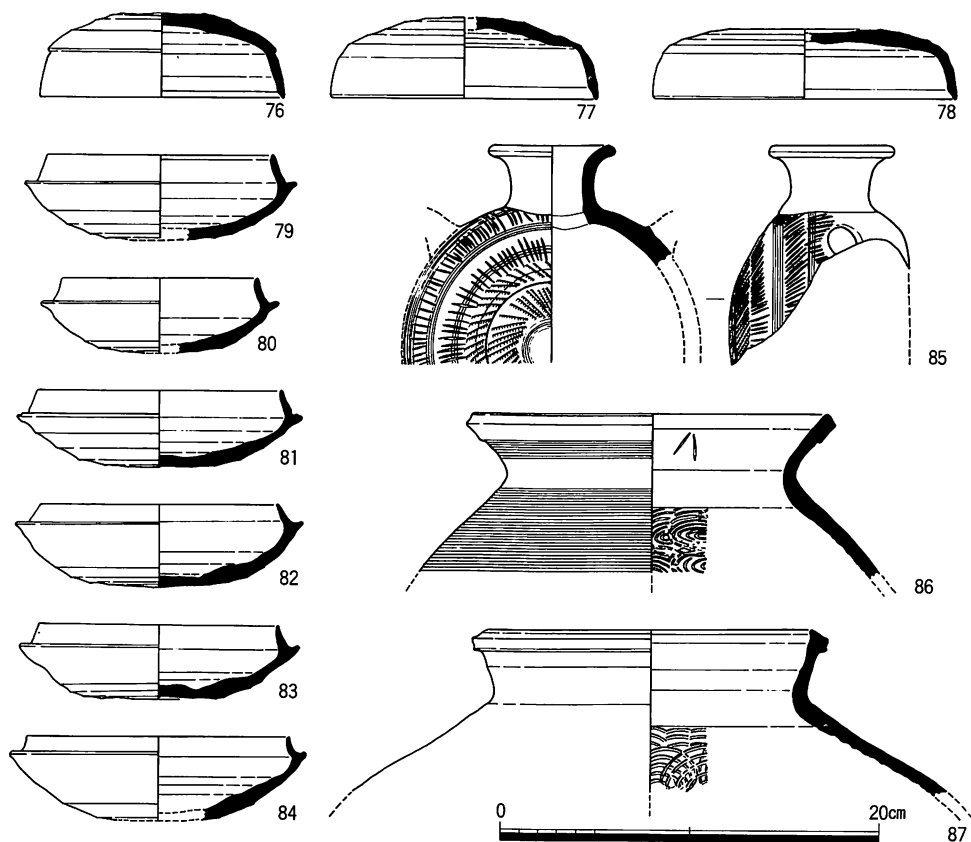


図5 竪穴住居址・褐色粘土（礫混）層出土土器

部の境は凹線が巡る。天井部内面中央は(65)が直線方向の仕上げナデ、(66)は同心円文の当て具痕跡が1箇所ある。(69)は平たい天井部に中央部の窪むつまみがつく。口縁端面は内傾する。天井部と体部の境は不明瞭な凹線が巡る。天井部外面をカキメ調整ののちつまみの周囲に櫛描き列点文を放射状に配する。65は口径15.5cm、器高14.5cm。66は口径13.9cm、器高4.3cm。67は口径15.1cm。68は口径13.7cm、器高4.2cm。69は口径17.5cm。

杯身(70~73) 底部はやや扁平で、たちあがりは内傾する。たちあがり、受部とも端部は丸くおさめる。受部上面に1条の凹線が巡るものが多い。70は口径11.4cm、器高4.2cm。71は口径13.6cm。72は口径13.0cm、器高5.2cm。73は口径15.2cm。

無蓋高杯(74) 体部は外傾し、口縁端部は丸くおさめる。体部中位から底部境にかけて鋭い稜と凹線を巡らし、中に櫛描き列点文を配する。口径11.2cm。

器台(75) 脚部は長くのび、裾部はゆるやかに開く。裾端部は断面三角形を呈する。底部に同心円の切り込みを入れ、脚部を接合する。脚部には長方形の2段透しを4方向に、

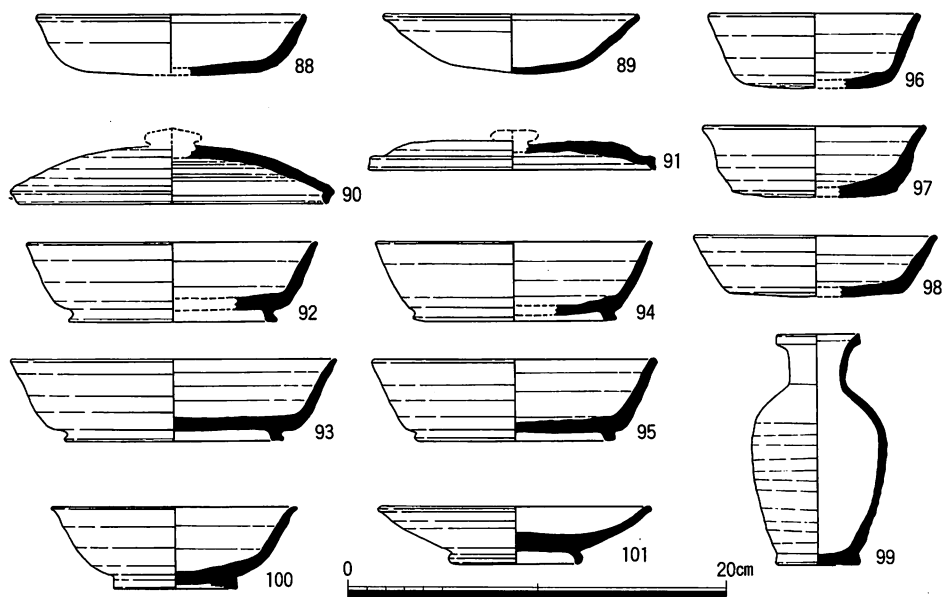


図6 流路出土土器

裾部に三角形の透しを4方向に千鳥に配する。筒部から裾部にかけて凹線を2条巡らし、各透しと対応して3段の文様帯を区画し、それぞれ細かい櫛描き波状文を配する。裾部径15.2cm。

褐色粘土（礫混）層出土土器（図5） 土師器・須恵器・円筒埴輪がある。土師器・円筒埴輪は細片で図示していない。なお図示したものうち（76）は竪穴住居址から出土した。

須恵器には、杯蓋・杯身・提瓶・甕がある。

杯蓋（76～78） 天井部は（76）がやや丸みを持ち、（77・78）は扁平に近い。口縁端面は内傾するが、端部は丸みをおびる。76は口径13.0cm、器高4.5cm。77は口径14.2cm。78は口径16.1cm、器高3.7cm。

杯身（79～84） やや古い要素を持つ（79）もあるが、たちあがりは低く、内傾度が強い。受部上面に1条の凹線を巡らせる（79・81・84）がある。79は口径12.1cm。80は口径10.6cm。81は口径13.1cm、器高4.1cm。82は口径12.7cm、器高4.4cm。83は口径12.8cm、器高3.9cm。84は口径14.0cm。

提瓶（85） 体部は前面が膨らみ、丸みをおびる。口縁端部は外反し丸くおさめる。肩部に吊り手がつく。前面はカキメ調整したのち、中心から外側に向かって放射状に櫛描き列

点文とヘラ描き刻目文を配する。口径6.7cm。

甕(86・87) 口頸部は短かく外傾し、口縁部外面に段を有する。断面は86が長方形、87が台形を呈する。86は頸部から肩部にかけてカキメ調整する。口頸部内面にヘラ記号がある。86は口径19.5cm。87は口径18.8cm。

流路出土土器 (図6) 土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器・無釉陶器・土製品がある。小破片が多く、出土量は少ない。

土師器には、皿・杯・甕がある。このうち皿・甕は小片で図示していない。

杯(88・89) (88)は体部が外傾し、端部は内側に肥厚する。(89)は体部が直線的に開き、端部は上方につまみあげる。88は口径14.3cm。89は口径13.6cm、器高3.2cm。

須恵器には蓋・杯_A・杯_B・瓶子・甕がある。このうち甕は小片で図示していない。

蓋(90・91) (90)は天井部がやや丸みをもち、口縁部は内傾する。(91)は天井部が扁平で口縁部は屈曲する。90は口径16.5cm。91は口径15.2cm。

杯_A(96~98) 平坦な底部に、外傾(96・98)ないしやや外反(97)する体部がつく。96は口径11.2cm。97は口径11.8cm。98は口径12.8cm。

杯_B(92~95) 平坦な底部に外傾する体部がつく。高台は、92・93が外方へ僅かにふんばる。92は底部外面に爪形状の圧痕が巡る。92は口径15.4cm、器高4.2cm。93は口径17.2cm、器高4.3cm。94は口径14.6cm、器高4.2cm。95は口径15.1cm、器高4.4cm。

瓶子(99) 体部はやや長胴で、なだらかな肩部に外上方にやや開く口頸部がつく。ヘラケズリによって台状に底部を削り出す。口径4.4cm、器高12.2cm。

無釉陶器 椀(100)がある。口縁端部は外反する。高台は削り出す。体部下半はヘラケズリ調整する。口径13.0cm、器高4.4cm。

灰釉陶器 皿(101)がある。口縁端部は外反する。断面三日月形の高台を貼り付ける。体部下半はヘラケズリ調整する。口径14.4cm、器高3.1cm。

4 まとめ

下鳥羽遺跡における発掘調査は、ようやく緒に着いたばかりであり、遺跡の具体的な内容については今回の調査でその一部が明らかになったに過ぎない。しかしながら調査成果の含む情報はいずれも重要で多岐にわたり、今後の調査・研究に明るい見通しをつけることができた。次に調査成果について概略をまとめる。

今回の調査では、南に拡がる低湿地を検出することができた。低湿地は堆積土層や出土

遺物から、古墳時代を通じて湿潤な状況を呈し、徐々に埋没したことが判明した。また低湿地北側の微高地状を呈する陸部では、竪穴住居や掘立柱建物があり、6～7世紀に属する集落の一部であると言える。3～5世紀に属する顕著な遺構は検出できなかったものの、湿地の土器出土状況からは、明らかに当地点で投棄した状況が窺われ、ごく近接した地域に集落がある可能性は高く、当調査地点を含めた周辺一帯に、ほぼ古墳時代を通じて集落が営まれたものと考えられる。

なお主として平安時代前期に属する流路は、鳥羽離宮造営前の当該地域の様相を把握するうえで重要な遺構と言える。

遺物については、各遺構などから主として古墳時代に属するものが質・量とも比較的多く出土した。いずれも下鳥羽遺跡における古墳時代前期から後期にいたる土器様相を把握するうえで重要な資料である。

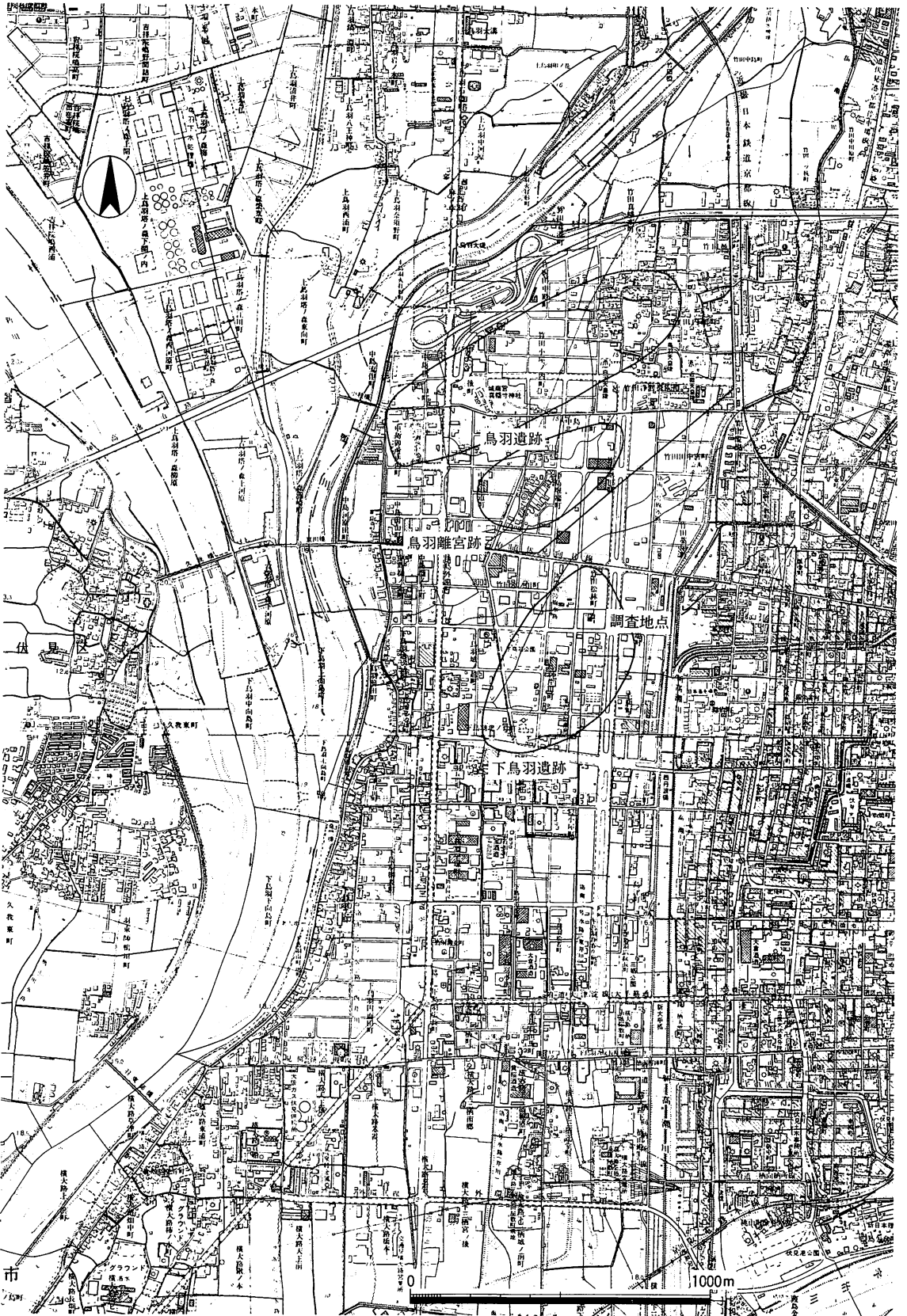
各遺物は、低湿地状遺構のうち、同下層のなかで暗オリーブ灰色粘土（炭混）層出土土器は庄内式に併行、オリーブ灰色粘土層出土土器は布留式に併行する。同中層の、灰ないし灰オリーブ色微砂・粘土層出土土器は5世紀中頃を前後する時期を考えている。また溝状遺構及び褐色粘土（礫混）層出土土器は、若干の幅はあるが、概ね6世紀後半に属し、後者はなかでも後出のものと考えている。

これら出土土器のうち、庄内式に併行する一群の土器は、圧倒的に在地色の強い土器群として評価できるが、そのなかに近江、東海、畿内中心部などの影響を受けたと考えられるものがあり、前代までと同様な様相が窺われる。また低湿地中層出土土器は、たとえば土師器では高杯が主体であるという特殊な出土状況や、初期須恵器は祭祀遺跡からの出土例が多いことなどを考え合わせると、当遺跡でも充分祭祀との関連性を想定することができよう。

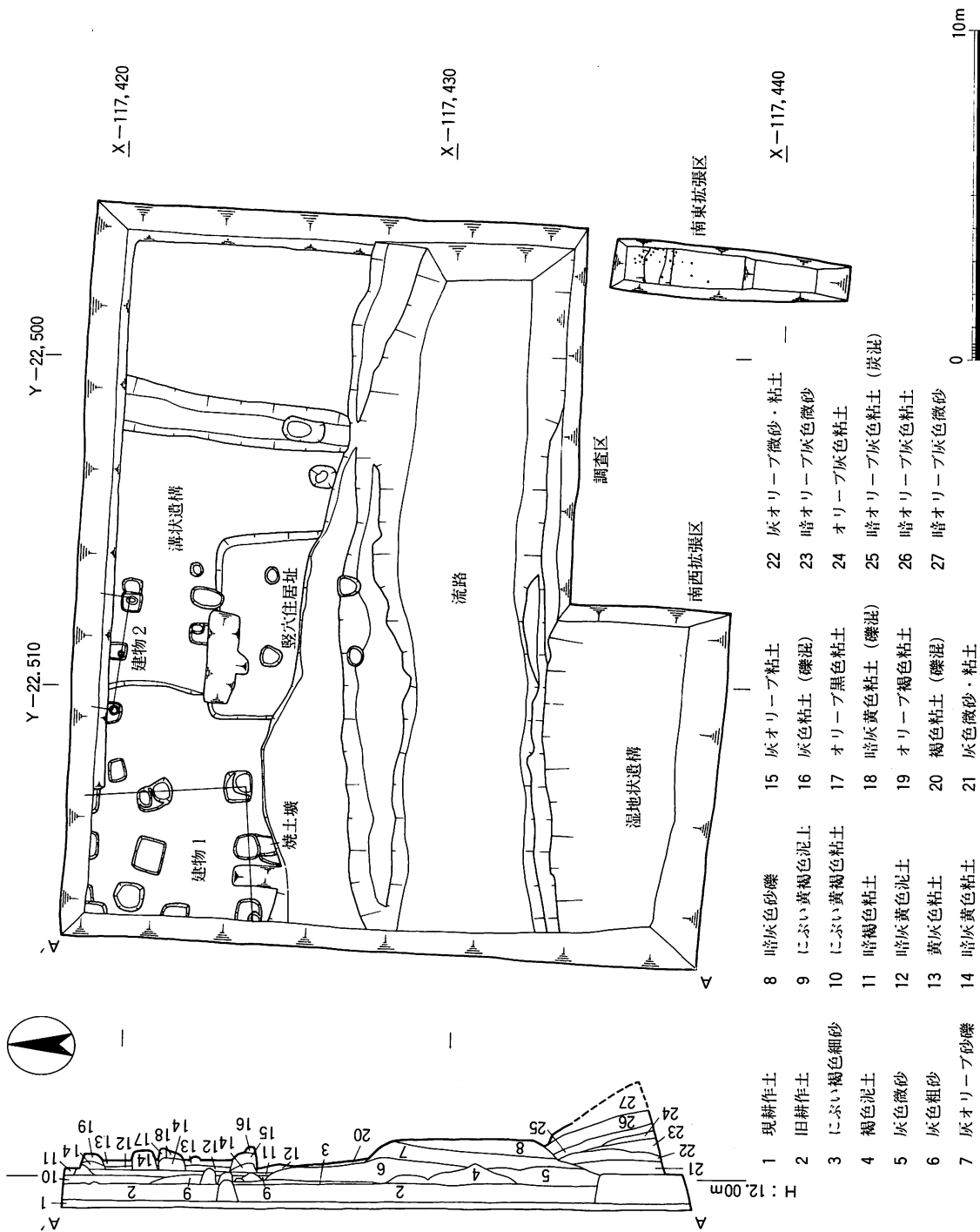
以上、下鳥羽遺跡における発掘調査の概要を述べてきた。得られた調査成果はいずれも当遺跡の地理的・歴史的条件を反映する資料として重要である。今回の調査結果からは、比較的遺跡の遺存状態は良好であることが判明しており、今後当遺跡における当該期の、さらには弥生時代に遡る、具体的な遺跡の内容が明らかにされる可能性は十分に期待できる。

註 1) 『須恵器大成』田辺昭三 角川書店 1981年

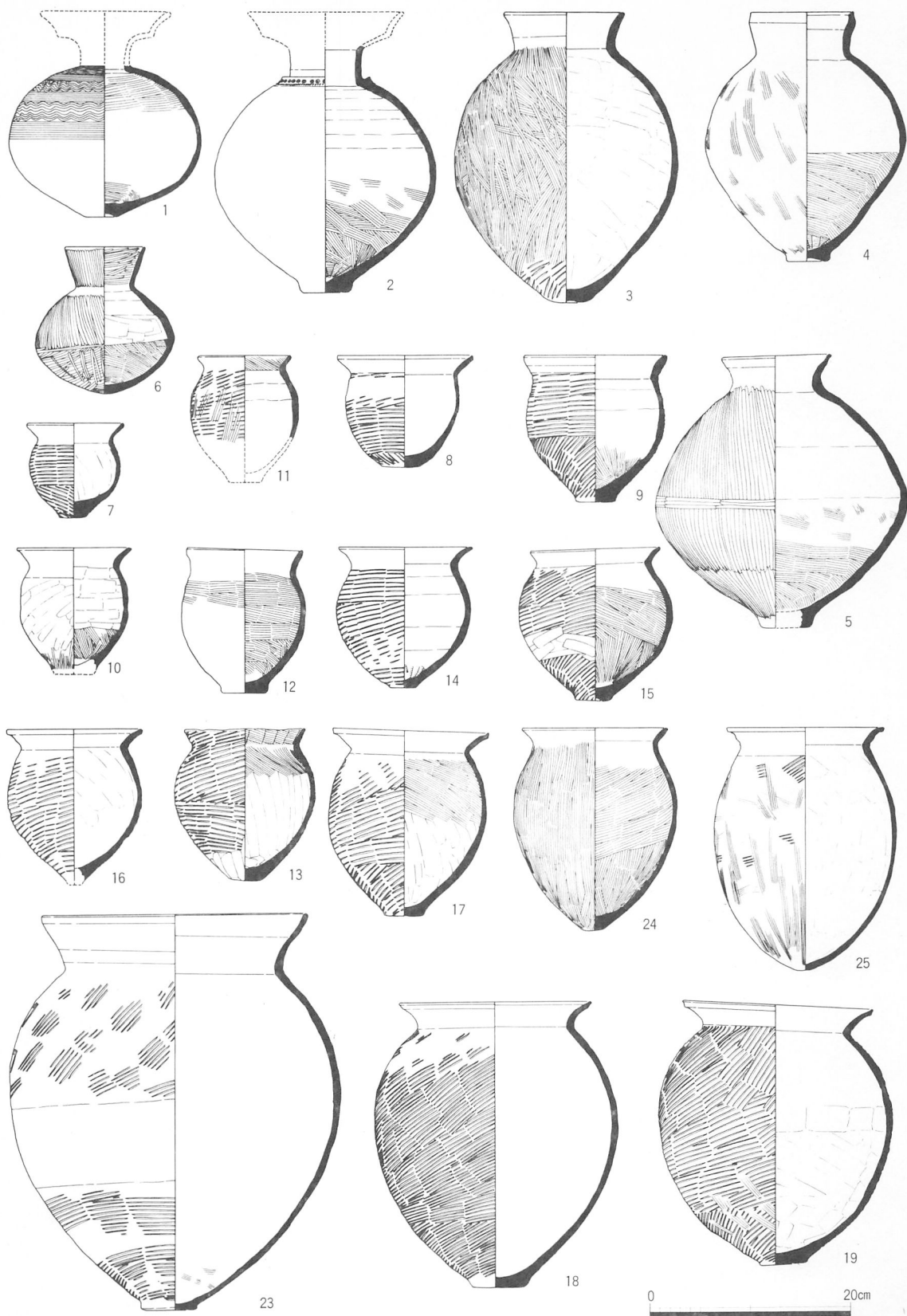
圖 版



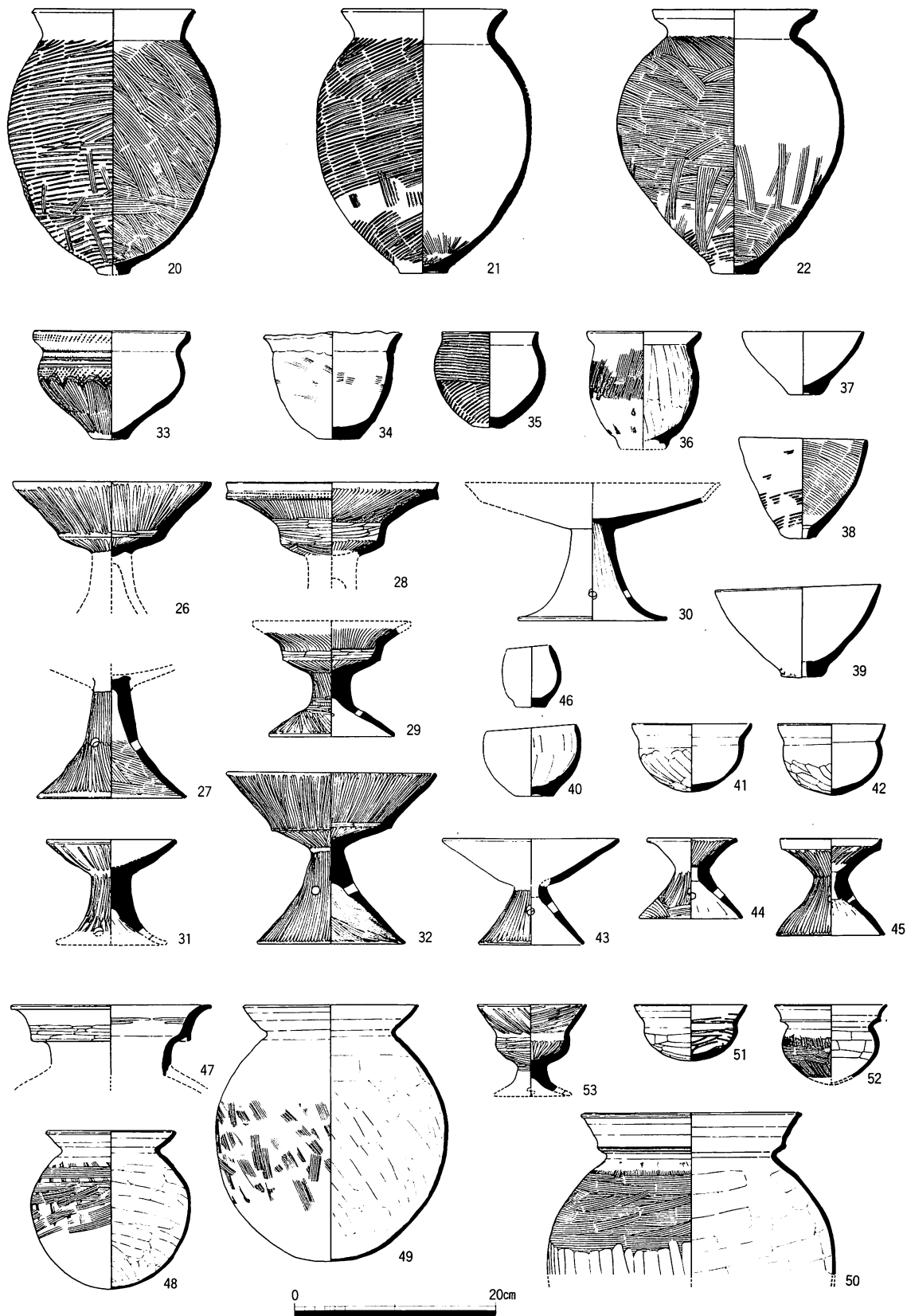
調査地点周辺主要遺跡位置図



調査区実測図



低湿地状遺構下層・遺物包含層出土土器



低湿地状遺構下層出土土器



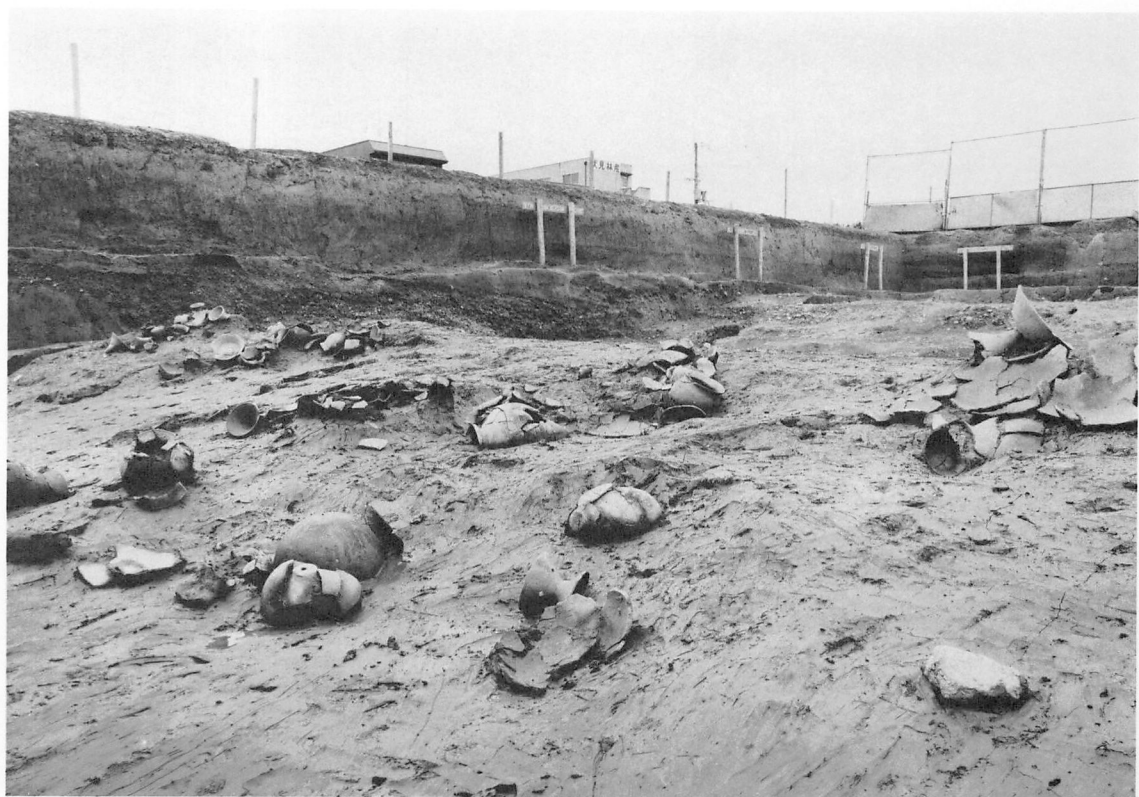
1 航空写真（昭和62年撮影、南から）



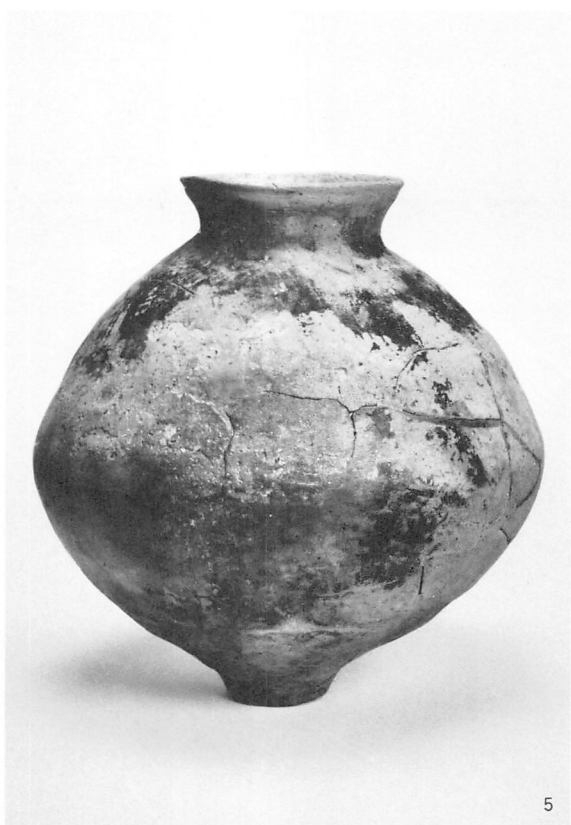
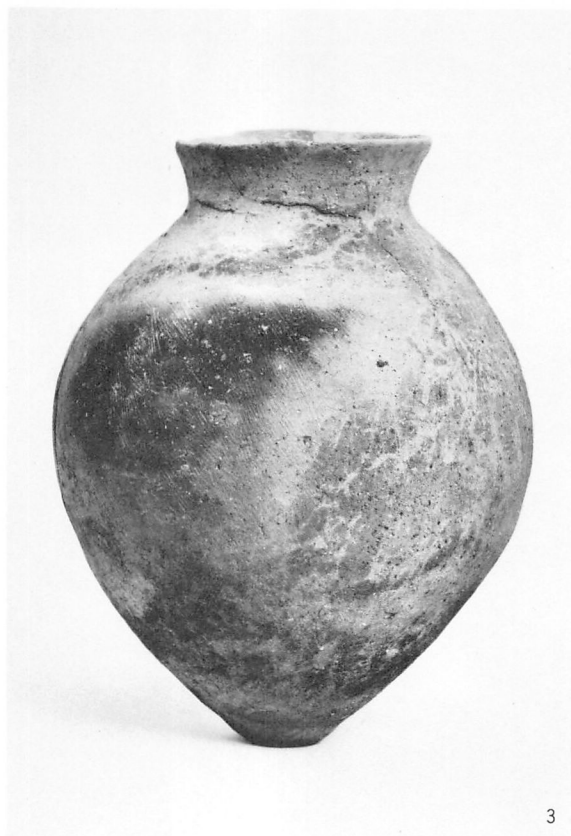
2 航空写真（昭和62年撮影、西から）



1 調査区全景 (西から)



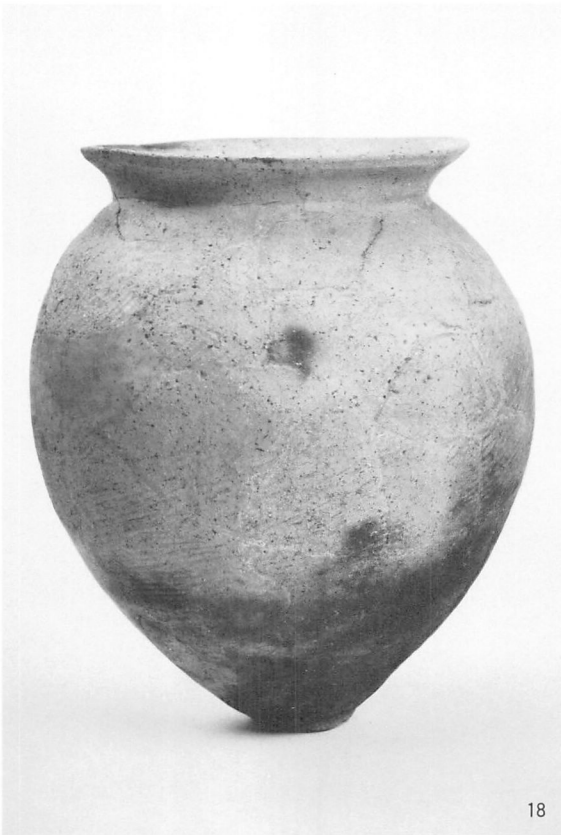
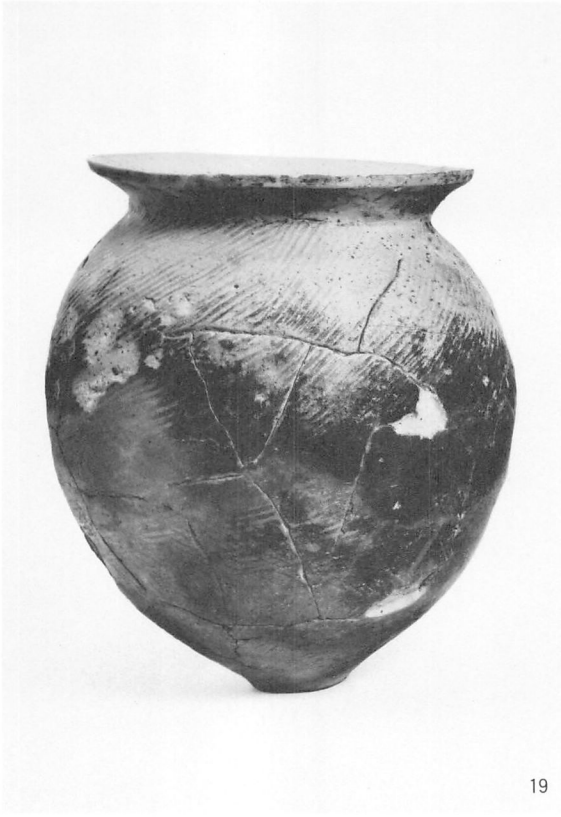
2 低湿地状遺構出土状況 (南東から)



低湿地状遺構下層出土土器



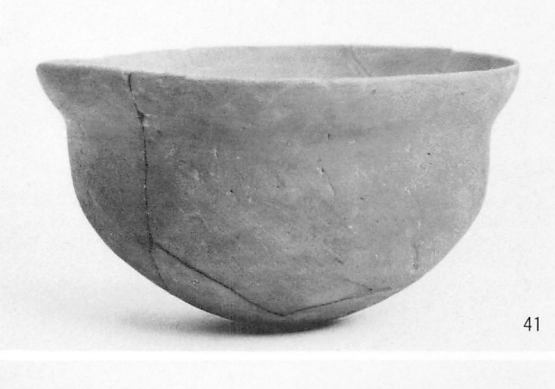
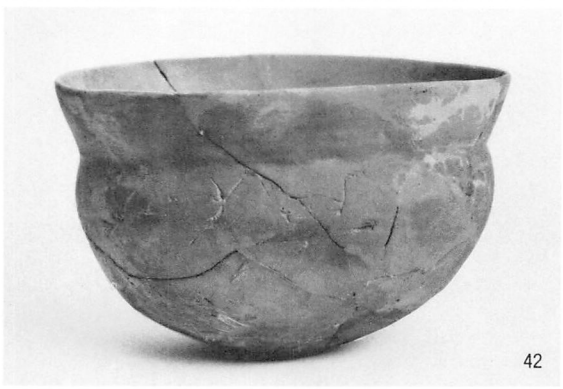
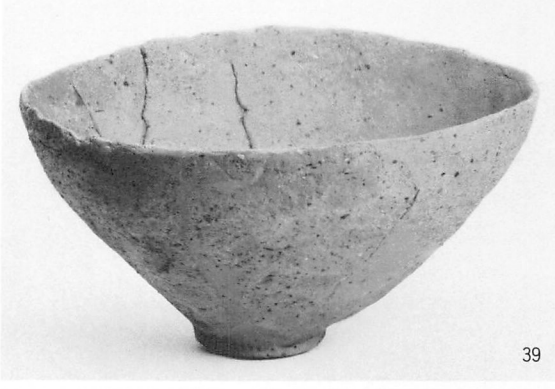
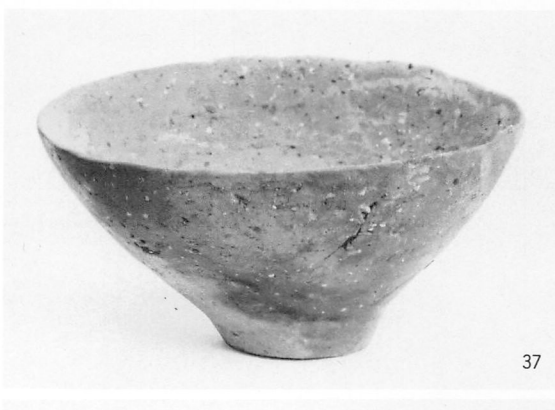
低湿地状遺構下層出土土器



低湿地状遺構下層出土土器



低湿地状遺構下層・遺物包含層出土土器



低湿地状遺構下層出土土器



52



51



53



50

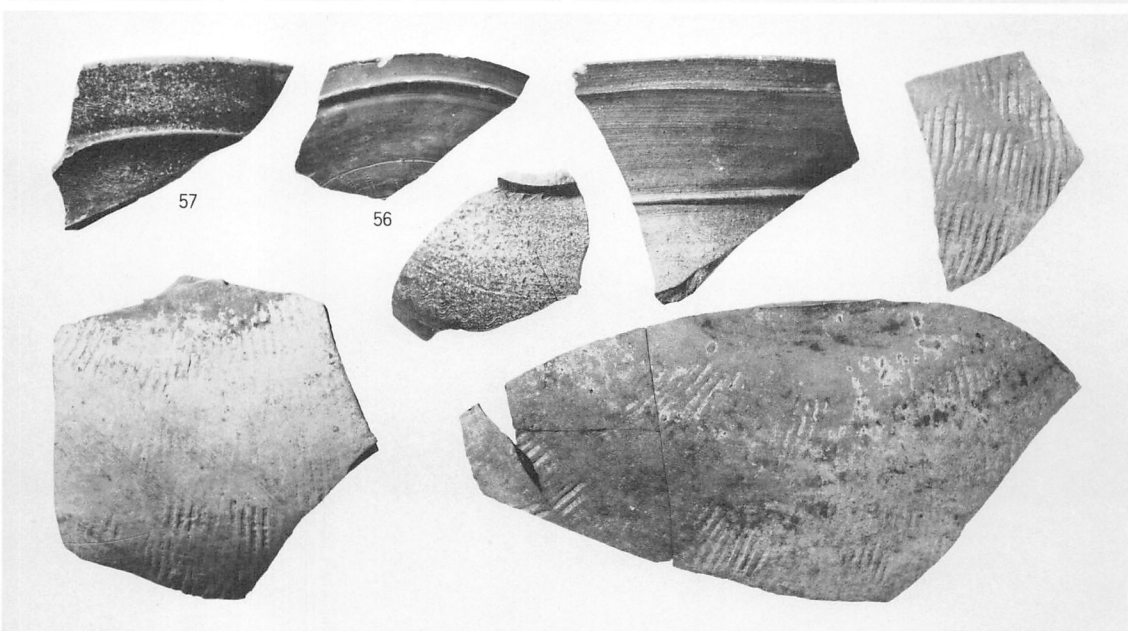


48



49

低湿地状遺構下層出土土器



低湿地状遺構中層出土土器



溝状遺構・豎穴住居址・褐色粘土(礫混)層出土土器

下鳥羽遺跡発掘調査概報

昭和62年度

発行日 昭和63年3月31日

発行 京都市文化観光局

住所 京都市左京区岡崎最勝寺町13京都会館内

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川大宮東入ル元伊佐町

TEL (075) 415-0521

印刷 真 陽 社